

筧へかけひの見える風景覚書

——漢詩と和歌と——

本 間 洋 一

不過翁々一片霞 翁々たる一片の霞あるに過ぎず

〔本朝無題詩〕卷八・526

源経信（一〇一六—一〇九七）に次のような漢詩がある。

遊長楽寺

長楽寺に遊ぶ

縁底暮春臨眺除

底に縁りてか 暮春 臨眺除かなる

閑遊出寺日将斜

閑遊して 寺を出づるに 日は将に斜め
ならんとす

竹梭纒瀧溪心水

竹梭は 纒かに溪心の水を瀧き

松偃被韜嶺面花

松偃は 嶺面に花に韜まれたり

逸客攀巖初躡履

逸客は 巖を攀ちんと 初めて履を躡き

禅僧養竈忽煎茶

禅僧は 竈を養りて 忽かに茶を煎たり

願望華洛求名処

願みて華洛求名の処を望めば

（試訳）暮春の時節は何故にかくも遠く見はるかせるのだらう。のんびりと遊んで寺を出るのは日も傾きかける頃このあたりでは、竹の樋がわずかながらに溪谷の水を引入れ瀧いでおり、枝を広げた松も花の折とて桜に包まれるという風情である。脱俗の士（の私共）は岩山を登るといふことで、初めて履などはいてやって来たわけだが、住持の僧は竈の火を消さずにいて、あわただしくも茶なぞを入れて下さり、お蔭様で一息つくことができたのでした。さて、この地から、名利を求め人々の覬覦する都の方を眺め渡しますと、そこには青白い一片の春霞が

たなびいているばかりであることよ。

本詩の尾聯に、稿者などは、大江正言(？—一〇二二)の「長
楽寺にて、故郷の霞といふ心をよみ侍りける」という詞書を有
する歌、^①

山高み都の春を見渡せばただひとむらの霞なりけり

〔後拾遺和歌集〕卷一・春上・38)

が想い合わされてならないのだが、それはさておき、今は第三
句に注目してみたい。実はこの山寺眺望詩の当該句には次のよ
うな自注が見えている。

山家之習也。穿_二竹節_一、引_二水脈_一、謂_二之懸梭_一。蓋斯竹梭
在斯処_二。故云也。

(山家の習ひなり。竹の節を穿ち、水脈を引き、之を懸梭^{かけひ}
と謂ふ。蓋し、斯の竹梭^{たけす}斯の処に在り。故に云ふなり)

これが詩句中の「竹梭」に付されたものであることは明らかで、
今日言うところの寛(かけひ)を指すことになる。「竹樋」「懸
樋」でないのは、後世のように「樋」字の用法が当時はまだ一
般的ではなかった為かも知れないが、それにしても「梭」(機
織で横糸を通す管を入れる道具)を用いる点にもなかなか興味
味深いものがある。水の流れを糸に譬え、さながら糸を通すが

ごとくに水を導く道具なのだという含意でもあるのだろうか。
ともあれ、「山家の習ひ」とあるから、当時の山家にはよく見
受けられる景物であったかと思われるのだが、文学作品に描か
れるものとしては、本詩は多分早い方に属するのではあるまい
か。これについて更に注目されるのは、和歌にも次のように見
えていることである。

長楽寺に住み侍りける比、人の何事かと言ひて侍り
ければつかはしける 上東門院中將

① 思ひやれとふ人もなき山里のかけひの水の心ほそさを

〔後拾遺和歌集〕卷一七・雜三・一〇四一)

先の漢詩(経信晩年の作か)もこの和歌も作時は不明ながら、
共に長楽寺に関わり、「かけひ」に注目している点で注意され
る。上東門院中將は従三位左京大夫藤原道雅(九二二—一〇五
四)を父とし、正五位下山城守藤原宣孝(？—一〇〇二)の女
を母とし、侍読・東宮学士・文章博士をもつとめた正四位下左
中弁藤原義忠(一〇〇四?—一〇四一)、『本朝麗藻』(詩人)の
室となった人物であり、恐らく経信より若干若いか、殆ど同年
代の者ではないかと臆測される。^②

さて、和歌について言えば、前掲の上東門院中將の作以後、

「かけひ」詠は次第に散見されるようになってゆくようである。

その詠まれ方の一端を伺うためにも、先ず『新古今和歌集』頃

までの作をいくらか拾挙してみると、凡次のようになるだろう

か。

男の絶えだえになりける頃いかかと問ひたる人の返

事によめる

高階章行朝臣(女)

②思ひやれかけひの水の絶えだえになりゆくほどの心細さ

を

〔詞花集〕二五八、〔後葉集〕三九一

暁

③山里のかけひの水のせはしきになほ有明の月ぞ宿れる

〔六条修理大夫集〕二六一、

〔堀河百首〕二二八五・雑廿首・暁

百首歌中に駒迎をよめる

④走り井のかけひの霧はたなびけどのどかにすぐる望月の

駒

〔散木奇歌集〕四六七、〔堀河百首〕七七六・

駒迎、〔扶木和歌抄〕五三二七

⑤水して水口遠しその日より算にかけし水は絶えにき

〔堀河百首〕一〇〇五隆源・棟

⑥逢坂のかけひの水に流るるは音羽の山のみぢなりけり

〔永久百首〕三六二兼昌・落葉、

〔扶木和歌抄〕一五七三七

⑦谷深み跡だに見えぬ山寺はかけひの水のゆくにてぞ知る

〔永久百首〕五五五頭仲・寺

右兵衛督家成卿東山にて山家初雪といふ事をよみしに

⑧小夜ふけてかけひの水のとまりしに心はえてきけさの初

雪

〔頭輔集〕一三九

山家初冬といへる心をよめる

藤原孝善

⑨いつの間にかけひの水のこほるらむさこそ嵐の音のかは

らめ

〔千載集〕三九五

一品聡子内親王仁和寺に住み侍りける冬ごろかけひ

の水を三の親王のもとにおくられて侍りければつか

はしける

輔仁親王

⑩山里のかけひの水のこほれるは音きくよりもさびしかり

けり

返し

聡子内親王

⑬山里のさびしき宿のすみかにもかけひの水のとくるをぞ

待つ

〔千載集〕一一〇三・一一一〇四

ありあけ

⑭山里のかけひの水にかけ見えて心細きは有明の月

〔待賢門院堀河集〕三二

羈旅

⑮走り井のかけひの水の涼しさにこえもやられず逢坂の関

〔清輔集〕三三〇、『久安百首』九九六、

〔扶木和歌抄〕一五七四四

媒妾約恋

⑯もらさんとかけひの水のうけうけて何のふしゆゑとどこ

ほるらん

〔林葉和歌集〕七六一

同じ頃新三位公保のもとへ左中將公光の朝臣訪れた

りとぎきて

⑰かなしさは木の葉のみかは山里のかけひの水の流れをも

とへ

〔林下集〕二五四

賀茂の方にささきと申す里に冬深く侍りけるに隆信

などまで来て山家恋と云事をよみけるに

⑱かけひにも君がつららや結ぶらん心細くもたえぬなるか

な

〔山家集〕六〇九

百首歌(秋二十三首中より)

⑲山里の竹のかけひのほそ水に心して散れ峯のみぢ葉

〔拾玉集〕三六〇

(冬八首中より)

⑳なれのみぞたえず音すと思ひつるかけひの水もこほりし

にけり

(同右、三六七)

建久八年百首題(鶯五首中より)

㉑鶯の谷より出づるはかぜにやかけひの水とけはじむらん

(同右、四四七三)

後度百首(春歌中より)

㉒山里は籬の小田の苗代にかけひの水をまかせてぞみる

〔壬二集〕一一五

初学百首養和元年四月(冬十首中より)

㉓つららるるかけひの水は絶えぬれどをしむに年のとまら

ざるらん

〔拾遺愚草〕六〇

(冬廿首中より)

㉔伝ひ来しかけひの清水つららるて袖にぞいづる冬の夜の

上東門院中將の歌(①)や経信の漢詩で、「かけひ」は山里・山家(歌詩共に長楽寺を指すから山寺も含まれる)の風俗として詠まれていることから、その後の和歌でも「山里」と繋る表現(③⑦⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲)をとることが多く、これは更に時代を下っても変わらない傾向と考えて良いようである。

「逢坂」の「かけひ」(⑥⑬)もその延長上にあるものとみて良いだろう。ともあれ、ここで稿者の先ず注目したいのは、和歌の表現の世界で(経信の漢詩には見られない)「かけひ」のイメージが形作られ展開しているという点であろうか。

②歌は①歌と殆ど重なる(従って影響下にあると考えられる)作で、初句のみならず「かけひの水」「心細さ」の言葉そのものもオーバラップする上、いずれも人の訪れのなさ(乏しさ)を嘆く叙情を基調とする点で共通する。

先の「心細さ」は「さびしさ」(⑩⑪)「かなしさ」(⑮)ともなり、「かけひ」の流れは「絶えだえ」(②)「とどこほる」(⑭)から「絶ゆ」(⑤⑳)「とまる」(⑧)などと詠まれる。

⑳たえずとふかけひの水のなさけこそおとづれながらさびしかりけれ
〔続古今集〕一六九五前大納言為家、

この歌では、絶えず訪れるものと言えは「かけひ」の水音くらいのもの。されば一入さびしさを募らせる媒にしかなりえない、という心情が込められていよう。猶、「訪れ」は後に更に「たより」とも詠まれてゆくことになる。

③歌の「せはしさに」は前掲②歌の「たえずとふ」同様の意にもとれるが、「かけひ」の勢いある流れを指すこともとなり、「走り井のかけひ」(④⑬)などのイメージとも重なる。その水の進りは、後の和歌ではそう多く詠まれることにはならなかつたようである。

耳を傾け聴く「かけひ」の水音も「氷る」(⑤⑨⑩⑮)と音を失い、春の解冻(⑪⑱)が待たれるということになるが、その水が凍ることや「つらら」(⑬⑲⑳)にも歌人達の関心が及んでいるのは興味深い。恐らく中国古典漢詩でもこのような詠み方は殆どなされていないのではあるまいか。

三

ここで本朝の漢詩に話題を移したい。管見では、経信以後しばらく算を詠む漢詩には恵まれず、南北朝に入る頃になって漸

く幾首か拾い出せるようだ。

修寛 (寛を修す)

数竿通節抱山岩 数竿 節を通して 山岩を抱き

吐碧吞清日夜談 碧を吐き 清を呑み 日夜談る

却咲道人機事懶 却て咲ふ 道人の機事に懶く

不教明月担頭担 明月をして担頭を担はしめざることを

(雪村友梅へ二二九〇—二三四六 『宝寛真空禪師録』乾)

この地には幾本もの寛がめぐり置かれて、さながら山寺を抱えるようであり、美しいみどりの水を導き、澄んだ清水を伝え通して、その水音は日夜人の語らいのようにも聞こえる。それは俗事のはかりごとに疎く気も進まずにいるわれらを笑い、寛の水に影をさしかける明月に何のねざらでもできぬのかというようでもある。例えば前掲為家歌(23)の四句目迄を寛の水の絶えず語らうように流れる様とみて、それでも本物の人の訪れではないから語らう相手にもできず、やはり心さびしさはどうしようもないと嘆ずる歌とみれば、本詩との懸隔は明らかである。寛の水は確かに、

心清浄故有情清浄 覚懐法師

にこりなきもとの心に任せてぞかけひの水の清きをも知る

〔続千載集〕九五九

などと和歌にも詠まれているから、清浄さという点で本詩と共通する面も勿論あるわけだが、それを機心ある者の語らいとして、また禅道の人と対峙するものとして詠まれることは、この頃の管見の和歌の世界にはなかなか見えてこないものようだ。

寛水 寛の水

竹能連続水能通 竹能く連続し 水能く通ず

百尺徒誇穿井工 百尺 徒らに誇る 穿井の工なることを

転注潺潺無昼夜 転た注ぐこと潺潺として 昼夜も無し

朝宗心在一竿中 朝宗の心は一竿の中に在り

(九淵龍蹠へ?—一四七四) 『九淵遺稿』

竹の寛はかくもよく連なり水を通すもの。井戸掘ならば百尺もの深さを巧みに掘ってその技術の功を誇ることになろうが、寛はこともなげに、益々水流を存分に提供してくれて、しかも昼夜を厭わぬ。すべての河水の海に集まるが如き妙徳備わる心とは、即ちこの寛の一竿の中に在ると言うべきである。猶、この詩には、

右門徒短尺、九鼎詩曰、三四、一夜二三升浅溜、厨人免

得汲腰酸、洛中諸刹、以詩鳴者、皆詠九鼎此詩、不

亦幽麗一哉。

という、九鼎笠重の句に言及する注が付されているが、その点は希世靈彦（一四〇三一八八）の次の連作の後半第二句とも関わっているようだ。^⑧

寛水（永享七年） 寛の水

曲折連筒水亦勞 曲折する連筒 水亦勞し

従今春圃在閑樺 今より 春圃に閑樺有り

不知剪尽幾竿竹 知らず 幾ばくの竿竹をか剪り尽くせる

源在山中高又高 源は山中に在って 高く又高し

引水涓涓竹作溝 水を引きて涓々たり 竹もて溝と作す

汲腰已省僕奴憂 汲腰已に省く 僕奴の憂へ

源頭不尽須帰海 源頭尽きず 須く海に帰すべし

莫道筒中是細流 道ふ莫れ 筒中は是れ細流なりと

〔村庵藁〕巻上

曲がりくねり連ねられた寛が水流を導くものとして見える。

田畑に水をくれるのはもとより難儀なものだが、この寛あるに依り仕事が楽になったはず。一体どれ程の竹を切り出したものかわからぬが、水源は山中の高きに在ってそこから引かれてい

寛（かけひ）の見える風景寛書

る。竹を穿って溝となし細い水流を引く。こうして僕奴らの水汲みの難儀もなくなった。水の源は尽きることなく、流れ来ってには終に海に帰ってゆくわけだから（その流れが集まり海となるのであるから）、一本の寛の中の流れは細々としたものに過ぎぬなどとはとても言えぬであろう。

和歌にも田畑に見える寛は詠まれていた^⑨が、右の詩のように水汲みの辛さと結びつけて詠む和歌は、この頃のものには見えないようだ。

ところで、和歌に詠まれていた凍る「かけひ」の漢詩もいくらか拾える。

凍寛 凍れる寛

山房引水遠連筒 山房に水を引くに 遠くより筒を連ぬ

雪後涓涓凝不通 雪の後は涓々たりて 凝りて通ぜず

水底今無疏撃手 水底 今に無し 疏撃そまくの手て

禹功未到一竿中 禹功未だ到らず 一竿の中

〔天隱龍沢〕一四三—一五〇〇〕〔黙雲藁〕

山房では遠くから寛を連ねて水を引いているのだが、雪が降り続き積った後ともなると、その細々とした流れも凍てついてしまった。こうなっては切り開いて通そうにも術はな

い。治水の功をもって聞こえる夏の名君禹王の力とて、さすがにこの寛一竿の中迄は及ばぬものであるらしい。卑近な生活の中で欠かせぬのは水であり、それを導いてくれるのは寛であるから、

山の家の水

かけひにはつららみにけり山人のあさげ夕げの水いかがる
〔実国集〕(三二)

などとも詠まれているわけだが、先の詩もこれに通ずる点があるとみて良いだろう。

この他にも寛に言及する詩はなくもないが、まずは極めて少ないものと言えようか。これらの漢詩詠の素材として採挙せられるに至った背景は必ずしも明らかとは言えないが、恐らく和歌世界で詠まれる対象として少ないとは言え、定着していたことも一因に在るとみてほぼ誤らないと思われる。

四

さて、最後に中国古典詩の世界についても聊か触れておきたい。と言っても唐宋の全詩を披見したわけではなく猶々たる範囲に留まると言うべきかも知れないが、寛を前掲本朝詩のよ

うに詩題とする作はまだ管見には入っていない。また寛を詠む詩も決して多いとは言えないようだ。いや、極めて稀と言う方がより適切かもしれない。因みに禅林で親しまれた詩人の一人黄庭堅(一〇四五—一一〇五)の作に求むれば、

寛水煙際鳴。万籟入秋木。

〔宿觀山〕、『全宋詩』卷一〇〇八

淪茗赤銅椀。寛泉蒼煙竿。〔丁巳宿寶石寺〕同右

清如接寛通春溜。快似揮刀斫怒雷。〔吏部蘇尚書

右選胡侍郎皆和鄙句次韻道謝〕同右書卷一〇一三

などとあって、山居や山寺と結びついている点本朝と同様である。その周辺の景物の一つとして寛(の水音やモヤの中のそれ)が詠まれ、清らかな流れを通すものというイメージも共通するとみて良いだろう。

また、南宋の四大家の一人に挙げられる陸游(一一二五—一二〇九)の作に粗々これを拾えば例えば次のような作が管見に入る。

巖倚团团桂。筒分細々泉。

〔慈雲院東閣小憩〕、『全宋詩』卷二二五八

竹算引泉滋葉壘。風爐篝火試茶杯。

〔遊〕法雲寺「觀」舞老新尊「小園」同右書、卷二二七〇）
地爐枯葉夜煨芋。竹覓寒泉晨灌蔬。

〔閉戸二首〕其一、同右書卷二二八四）
緑窓静対千梢竹。翠竇新疏一脈泉。

〔閑中富貴二首〕其一、同右
溪煙漠漠弈棋軒。覓水潺潺種菜園。

〔退居〕同右書卷二二九四）
山果滿筐猿食足。右泉通筧菜苗肥。

〔齋中雜興二首〕其一、同右書卷二二〇一）
桔櫟灌蔬固已非。竹覓澆花宜見譏。

〔冬晴行〕園中二首〕其二、同右書卷二二二六）
もとより彼には九千首を越える膨大な詩篇が今日に残されているわけであるから、其中の僅々十首程に見える覓が、詩人の中で特別な意味を持つものであったとは考えにくい。それは山に沿う寺院や田園生活ではありふれた景物の一つに過ぎず、その存在そのものに集中して何らかの観想をめぐらすというような痕跡も殆ど窺われないように思われる。さりとて、前掲の五山詩僧達が、黄山谷や陸游らの覓を詠む詩を全く知らなかったなどと言うつもりも勿論ない。和歌世界で聊かなりと詠まれてい

た素材が宋詩の世界にも見出された時、むしろ彼らは一層の親近さを覚えていたかも知れない、などと思いを回らせてみたくなるのである。

〔注〕

- (1) この歌は他に『能因法師集』(二五〇二七)に、大江嘉言「渡りつる水の流れを尋ぬれば霞める程や都なるらん」、能因「よそにてぞ霞たなびく故郷の都の春は見るべかりける」の二首と共に所収されており、川村晃生氏(『能因と大江氏歌人たち』『撰関期和歌史の研究』三弥井書店、平成三年)は、長楽寺という東山の山里から「都を再発見し再認識することによって」「新たな表現や詠みぶり」を彼らは形成して行ったものかと指摘している。また、前掲三首は寛弘四年(一〇〇七)頃の作かとも推定される(『新風への道―後拾遺歌人の場をめぐって―』同右書所収)が、高重久美氏は寛弘六年頃と考えておられる(『和歌六人党とその時代』へ「六人党」の世界、第二章能因、三『能因と東山』和泉書院、平成十七年)。猶、正言歌の「見渡せば」に注目した好論に近藤みゆき氏「見渡せば」と「眺望」詩(『古代後期和歌文学の研究』風間書房、二〇〇五年)のあることも付記しておきたい。

(2) 「樋」字は『王仁胸刊謬補缺切韻』(唐写本)や『宋本広韻』(芸文印書館版)などには見出せないよう(周祖謨編『唐五代印書集存』〈台湾学生書局〉も参看、『集韻』(世界書局版)になって「樋。施東切。音通。木名」と見える。『和漢三才図絵』(巻十五・芸才)では「集韻」を受けながらも「倭字」として「樋(木名也而倭以為水竇之稱、取通水之義)」と本朝の意義にも言及する。猶、院政期の古字書である『観智院本類聚名義抄』には「樋。谷通字。ヒ」とあるので、この頃既に使用されていた徴証はあるとみて良いだろう。猶、岡本保孝(『倭字攷』)は「樋。東鑑ニ一アリ。戸寛ノ義也ト。和訓栞ニアリ」とも記している。ところで、「かけひ」は「寛」と記するのが今日では一般的であろう。この字は既に『切韻』『広韻』に見え、共に「以竹通水」と字義を記す。本朝の古字書にも「寛。公珍反。芋。通水」(『天治本新撰字鏡』)「寛。吉演反切。以竿通水」(『観智院本類聚名義抄』)と記されるものの、二書に和訓は見えない。『康熙字典』でも採挙げて記すように、用例としては白居易「銭塘湖石記」(『白氏文集』)那波本巻五九、馬元調本巻六八。作品番号二九一八)に「銭塘湖、一名上湖。周廻三十里。北有石函、南有寛。凡放水溉田、每減二寸、可溉十五餘頃。每一復時、可溉五十餘頃」。(中略)其石函南寛并諸小寛闕、非澆田時、並須封塞塞。数令巡檢、小有漏泄、罪責所由。即無盜

洩之弊矣。又若水霖雨三日已上、即往々堤決、須所由巡守預為之防。其寛之南旧有次岸。若水暴漲、即於次岸洩之。又不減、兼於石函南寛洩之、防堤潰也。(下略)など見えている。これによれば、この文字は平安朝文人達の知識の範疇に入っていた蓋然性も高いのだが、一般的に使われていたものであったかは必ずしも明らかではないようだ。

(3) 川村氏(注1所引論考「新風への道」)は高岳相如の「初冬於長楽寺同賦落葉山中路詩序」(『本朝文粹』巻十・三一八)を挙げ、長楽寺が既に詩壇の人々の風趣の場として重要な場となっていて、それが能因らの和歌の場としても生かされたという見方をされる。猶、上東門院中將のことも高め重久美氏「能因と東山」(注1所引論考所収)も参照されたい。

(4) 以下の和歌掲出に当たっては『新編国歌大観』(角川書店)に依る(但し仮名表記は一部漢字に改めたところもある)。和歌以外の仮名文の「かけひ」の例としては、「今、日野山の奥に跡をかくして後、東に三尺あまりの庇をさして柴折りくぶるよすがとす。南に竹の簀子を敷き……(中略)その所のさまをいはば、南に懸樋あり。岩を立てて水を溜めたり。林、軒近ければ爪木を拾ふに乏しからず」(『方丈記』)あたりが早いものの一例に挙げられようか。

(5) 例えば「おとづるるかけひの水のたよりに身を任せぬは此世なりけり」(為氏)「うけがたき世にもすみかの有りけりと

かけひの水のたよりをぞとふ（寂西。以上『弘長百首』六三九、六四四）。

(6) 以下の引用詩の本文はすべて『五山文学新集』（玉村竹二編、東京大学出版会、昭和四十二—五十二年）に依っているが、詩の解釈については全くの私見であり、先覚の御批正をお願いしたいと思う。

(7) このままでは一韻到底叶わず（「談」「担」は下平声覃韻であるが、「岩」は咸韻。恐らく音の近い「龕」「山籠」で山寺の意）のつもりではないかと稿者は臆測している。猶、結局の用字にも疑義（衍字あるか）あり、熟さない臆測に留まることを断っておきたい。

(8) 「竹筧」「升水」詩（『翰林葫蘆集』巻四）もこれをふまえるものか。

(9) 五山文学作品を粗読する間の管見に入った他の作に「題」通玄庵（『空華集』）「凍笥」（『驢雪藁』）などがある。

(10) 以下の宋代詩の引用本文はすべて近年完結した『全宋詩』（北京大学出版社）に依っている。